地域でのボランティア活動に参加した看護学生の学び

田中健太郎[1)]，阿部誠人[1)]，纐纈朋弥[1)]，小林和成[1)]，松波美紀[1)]
[1)]岐阜大学医学部看護学科

1. はじめに

岐阜大学医学部看護学科では、平成 28 年(2016 年)から本学の強みを発信するために、『社会貢献部会』を発足させ、地域の活性化、岐阜県内の看護職の定着化、看護の質の向上に向け、取り組みを行ってきた[1)]。この背景には、岐阜県が抱える保健医療を担う看護職員不足への危機感から、看護教育・人材育成の充実に加え、地域住民の方に広く看護を知ってもらい、医療の担い手を育む必要性を感じたことにある。また、この取り組みは、教員のみの活動にとどまらず、学生による主体的な実践を目指し、教員と学生との協働、さらには地域と共に歩むことを志向している。しかしながら、これまで、看護学科として組織的な地域での活動実績はなく、どのような場所にどのような方法で活動を展開していけばいいのか分からない状況にあった。そのため、平成 30 年(2018 年)3 月に岐阜駅前にて、看護学生主体による地域住民へのアンケートを実施し[2,3)]、199 名の方から回答を得た。その結果、看護学生の活動の場として、地域行事（祭り・運動会等）への積極的な参加を求める声が多く聞かれ[3)]、今回、学生主体による初の地域ボランティア活動として、平成 30 年 10 月に岐阜市 A 町での地区市民運動会にて活動を行った。本報告では、その具体的な活動内容とともに、地域でのボランティア活動に参加した看護学生の学びについて報告を行う。

2. 実践内容

1) 活動目的

(1) 看護学生が地域の方と接する機会を通して、あらゆる世代とのコミュニケーション能力の向上をはかる。
(2) 地域の人々の健康への意識や関心について知る。
(3) 学外での活動が、看護を学ぶ上で、どのように活かすことができるのか考える。

2) 学生ボランティアの募集方法

学生ボランティアの募集については、①1・2 年生を対象とした説明会の実施（9 月）、②ポスター等を用いた公募、③教員が担当する学生*への参加呼びかけによる方法を用い、ボランティアを募った。

＊ 本学では学生の修学や生活上の相談等に応じる助言教員制度を設けており、看護学科では入学した時点で選択した教養セミナーを担当する教員が 3 年間の助言教員になり、1 学年 2〜3 名の学生を担当している。

3)　事前準備

今回活動を行った岐阜市 A 町の自治会長とは、これまでも本学科での取り組みに協力を頂いており、運動会でのボランティア活動についても、予め承諾を得て実施した。また、自治会長とは平成 30 年 7 月に事前打ち合わせを行い、8 月には当該地区で実施されている地域福祉活動（ふれあいサロン）に、3 名の教員が参加し、地域の様子について事前に見学を行った。

4)　活動当日

平成 30 年 10 月 21 日（日）8:30〜15:30、岐阜市 A 町にて地区市民運動会が開催され、当日参加した学生は、1 年次生 5 名、2 年次生 3 名、4 年次生 1 名の計 9 名であった。活動前に取り組みの趣旨等について説明を行い、参加者の安全に配慮した取り組みの実施に向け準備を行った。具体的な取り組みに内容については、下記(1)〜(3)であり、健康・体力チェックには 355 名（記録用紙配布枚数）の参加、地域住民へのアンケートでは 120 名の方から回答を得た。

(1) 健康・体力チェック：血圧・身長・体重・BMI・握力測定
(2) 高齢者疑似体験：小学生用体験セット「つくし君」ならびに中学生以上体験セット「うらしま太郎」を使用
(3) 地域住民アンケート：「看護に対する要望」や「看護学生に期待すること」等、22 の質問項目

学生は(1)〜(3)の内容を適宜ローテーションで実施し、回数を重ねることで地域住民の方とのやり取りもスムーズになり、積極的に声掛けを行っていた。また、住民の方からの話にも、熱心に耳を傾けていた。(写真 1・2 参照)

写真 1 全体の様子

写真 2 血圧測定の様子

5) 地域住民アンケート結果

回答頂いた方々の基本属性は表 1 の通りであった。50〜60 歳代が約 50%、20〜30 歳代が 30%となっており、前回のアンケートと比較し[2,3]、20〜30 歳代の方が約 10%増加していることが特徴であった。また、大学生との交流については表 2、看護については表 3 の通りであり、大学生が地域で積極的に活動することを肯定的に捉える意見が多い一方で、岐阜大学に看護学科があることを認知している方々は 50%を切る結果となっていた。

また、紙面の関係上、表には示せていないが、『看護学生への期待（自由記載）』に関する聞き取り内容を検討・分類した結果、『励まし・応援』『地域・社会』『資質』『知識・実践能力』『看護倫理』『コミュニケーション』『その他』に分類でき，『励まし・応援』『地域・社会』に関連する内容が最も多く認められた。具体的な内容として、「医学をきちんと学んで頑張ってほしい」「立派な看護師になってほしい」「岐阜県に残って仕事をしてほしい」「地域に出かけて直接人と触れ合って欲しい」などの意見が認められた。なお、聞き取り内容のまとめ（データ入力）については、1 年次生 5 名が教員の指導のもと、入力を行った。

6) 活動後の学生アンケート結果

後日、参加した学生 9 名にアンケートを実施し、9 名全員から回答を得た。アンケートの内容は、『活動目的の達成度』に加え、『住民アンケート結果（表 1〜3）』『看護学生への期待』について、結果から読み取った内容について、感じたことや考えたこと等、自由に記載する内容とした。また、上記の点に加え、『活動に参加した率直な感想』や『学外活動を推進する条件』『ボランティ活動に消極的な学生の理由』など、学生の率直な意見を反映することができる質問項目もアンケートに入れた。結果、多くの学生はボランティア活動への参加が初めてであったが、活動を通じて多くの学びや気付きがあったと記しており、詳細は下記の通りであった。

※ カッコ内の数字は学年を表す。例：1 年次生→(1)

【活動目的の達成度】

「地域の方は学生に大きな期待を持ってくださっているということが分かり、自身のモチベーション向上につながった(1)」「日頃は交流する機会のない年代の方ともお話しすることができ、新しい視点を知ることができた(1)」「学生の活動に興味を持ってくださっている方が多く、岐阜大学の看護学科についてたくさんの質問をしてもらえたことがうれしかった(1)」「看護師となる私たちに期待する事を直接聞くことができたため、自分の将来について考えるきっかけになった(1)」「自分はどのような看護師になることを目指したらよいか、深く自分に問い直すきかっけにもなった(1)」「血圧を測るなど、看護師の疑似体験ができ看護技術の向上の

ためにどんな工夫が必要なのか考えることができた(1)」「はじめての参加だったので、最初は地域の方たちに話かけることが難しかった。しかし、勇気を持って話しかけると、親切に対応して頂き、とても嬉しかった(1)」「高齢の方に対して、結果について分かってもらえるようにどう説明すべきかを考えて接する事ができ、勉強になった(1)」「身体測定では小学生くらいの子どもたちと多くふれあい、理解度を見ながら説明していくということを学んだ(2)」「看護は人と接する仕事なので、地域の方々との交流を通して、相手の年齢にあった声掛けや話し方、ニーズを収集する力が向上したと思う(2)」「子供からお年寄りまで、自分自身の成長や体調のことなど、それぞれの年代で体の状態・健康に関心があることが分かった（学童：身長や体重、高齢者：血圧など）(2)」「様々な年代の方と交流することは、お互いの考えを知るなどの点において非常に重要であるため、これからも続けていきたいと思う(2)」「地域について興味関心を持つことは、地域の問題について積極的に取り組む力が身につくと考える(2)」「（教養・基礎科目が多い）低学年では座学が中心となり、実際に人と関わることがない。そのため、血圧測定の方法一つとっても、血圧測定の必要性を頭では理解していても、実際にコミュニケーションを取りながら体験できることは、より学ぶ意識につながるのではないかと思う(4)」

【住民アンケート結果からの読み取り】　※全学年ほぼ同意見

「看護学科を知っている人が半分以下であることに驚いた。このような活動を通して多くの人に認知してもらえたらと思った」「多くの方に期待されていることがわかり勉強を頑張ろうと思った」「優しい対応、人としての質、親切、思いやりなど、看護師に求める姿が分かり、少しでも地域の皆さんが求める姿に近づけるように、頑張っていきたいと感じた」

【学外活動の感想・活動推進の条件等】

「本当に貴重な機会だと感じた。身体測定自体、測る側が初めてで、血圧測定など色々と挑戦することができ、良い経験になった(1)」「アンケートでは、自分で声を掛け、答えてもらうので緊張したが、快く答えてもらい、話しかけてもらったことが嬉しかった(1)」「話したことのない下級生とも話すことができたので良かった(2)」「地域の方の意見を直接聞く機会は普段の講義では少なく、貴重な機会だと思う(2)」「活動内容の詳細な情報を提供してもらえると、イメージがわきやすく参加しやすい(1,2,4)」「地域活動を通じて、どのような経験ができ、メリットがあるのかが分かると、活動意欲に繋がると思う(1,2,4)」「友達と一緒にできると参加しやすい(1,2)」「活動前後に大きな課題やテストがないこと。交通費があまりかからないこと(2)」「指導教員の先生から学生個人へ活動員募集のメールをする(2)」「学科としての活動なので、もっと宣伝してもいいと思う。掲示板だけでは見ない(4)」

表1. アンケート回答者内訳（n=120）

		n（人数）	%
性別	男性	42	35.0
	女性	77	64.2
年齢	20歳未満	6	5.0
	20歳代	21	17.5
	30歳代	15	12.5
	40歳代	7	5.8
	50歳代	38	31.7
	60歳代	27	22.5
	70歳代	3	2.5
	80歳以上	2	1.7
職業（複数回答）	会社員	27	22.5
	公務員	5	4.2
	団体職員	2	1.6
	自営業	9	7.5
	学生	0	0
	パート・アルバイト	40	33.3
	働いていない	29	24.2
	その他	7	5.8
同居家族（複数回答）	一人暮らし	5	4.2
	配偶者	75	62.5
	子ども	75	62.5
	孫・ひ孫	8	6.7
	父母	23	19.2
	兄弟姉妹	7	5.8
	その他	2	1.7

※欠損値がある場合は総数に満たない

表2. 大学生との交流について

1）居住地域で，これまでに大学生との交流の機会・場はありましたか？

	n（人数）	%
ない	107	93.0
ある	8	7.0

2）1）で「ある」と解答された方

どのような機会・場でしたか？（自由記載）

	n（人数）
大学祭	1
教育実習	3
公民館等	2
その他	3

3）大学生が地域で積極的に活動することについて，どのように思われますか？

	n（人数）	%
良い	104	90.4
良くない	0	0
わからない	11	9.6

表3. 看護について

1）岐阜大学に医学部看護学科があることを知っていましたか？

	n（人数）	%
知っていた	53	46.1
知らなかった	62	53.9

2）岐阜県に看護職が不足していること知っていましたか？

	n（人数）	%
知っていた	51	45.9
知らなかった	60	54.1

3）病院を受診する際や入院時には顔見知りの看護師に看護をしてもらいたいですか？

	n（人数）	%
してもらいたい	44	40.0
してもらいたくない	14	12.7
どちらでも良い	52	47.3

3. まとめ

今回の取り組みは、学生主体による地域での初のボランティア活動だったが、学生のアンケート結果からも多くの学びが認められた。活動目的の一つでもあるコミュニケーション能力の向上については、多くの学生で学びを実感する結果となっていた。特に学童期や高齢期の方々には普段接する機会も少なく、関わり方に戸惑いや難しさを感じていた学生も多かった。しかしながら、地域の人たちの温かい励ましや人と接することの喜びを通じて、成功体験を生み、その経験が自己効力感の向上や次の取り組みに向けた原動力となっていたと考えられる。また、測定結果を伝えたり、アンケートの記載依頼をしたりするなど、どのような方法で伝えれば、効果的に相手に伝えることが出来るのかを、自問しながら活動に参加できていたことは、主体性を育む上で、貴重な機会となったと考える。他にも、様々な年代の人に対応する柔軟性や状況判断能力、丁寧に聴く力など、自身の体験を通じて得られた学びは、看護職に求められる社会人基礎力[4)]でもあり、学外での経験が自身の基礎力を培う

上で、重要な役割を担っていたと考える。更に、今回の活動では、地域の人々の健康への意識や関心について知ることも目的としていたが、この点についても学生は多くの気付きを得ていた。医療制度改革に伴い、今後益々地域での看護活動に重きが置かれる中、それぞれの地域の特徴や課題、強みを理解することは、病院内外を問わず、看護職にとって重要な視点となる。そのため、地域の人々の健康への意識や関心を知ることは、地域を知る第一歩となり、これまでの学生の学びからも、活動の目的を達成することができたと考える。

一方で、学生ボランティアの募集方法については、課題が残った。これまで、社会貢献部会の活動案内は、主に学生が利用する掲示板や教室内での掲示など、紙ベースでの呼びかけが中心であったが、この方法では、学生に十分な情報が届いていないことがわかった。また、直接的な声掛けを行ってはいたが、より多くの教員からの働きかけが必要であることを学生が示しており、今後の活動を展開していく上でも、非常に有益な情報を得ることができた。今後は、具体的な働きかけや周知方法等について検討し、より多くの学生に情報を届ける仕組みづくりを構築していく必要があると考える。特に、学生は学年や時期によって、授業や実習など、多くの課題に取り組んでおり、休日を返上してまで、学外での活動に取り組むことが難しい状況にある。そのため、時間的な余裕をもって活動案内を出したり、活動のメリットを具体的に示したりするなど、学生の興味を引く仕掛けづくりが、重要になると考える。また、活動のメリットを示す上でも、ボランティア活動等、学外での活動に参加した学生と参加していない学生において、実習や授業での学びの深度に差があるのかなど、活動の有効性について評価することも検討し、今後も継続して取り組んでいきたい。

4. 謝辞

本学科の取り組みにご協力頂きました岐阜市A町の皆様に、心より感謝申し上げます。本活動は平成 28〜30 年度岐阜県看護学生等県内定着促進事業費補助金ならびに平成 29 年度岐阜大学活性化経費（地域連携）の支援を受け行っている。

引用文献

1) 看護職輝き輝き（イキイキ)プロジェクト 平成29年度 岐阜大学医学部看護学科 活動報告 社会貢献部会
2) 田中 健太郎, 阿部 誠人, 纐纈 朋弥, 小林 和成, 松波 美紀(2018). 地域住民が看護学生に期待すること 地域住民健康教育プログラム実践報告①. 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, (4) 165-171, 2018.
3) 阿部 誠人, 田中 健太郎, 纐纈 朋弥, 小林 和成, 松波 美紀(2018). 看護学生が地域で活動するという意味 地域住民からの聞き取り活動を通して 地域住民健康教育プログラム実践報告②. 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, (4) 95-101, 2018.
4) 箕浦とき子・高橋恵（2016）. 看護職としての社会人基礎力の育て方. 日本看護協会出版会.